

8月18日(金)の朝、友人の稲垣さんと私は「音吉顕彰会」のツアー「シンガポール 音吉を偲ぶ旅」に参加し、シンガポールに出かけました。今年は音吉生誕200年の節目の年です。音吉顕彰会は知多半島美浜町にあり、メンバーもほぼ地元の方々ですから、私たちは飛び込みのような存在でした。

私は夫の郷里である大分県国東半島でペトロ・カスイ岐部(1587-1639)の像(舟越安武作)を見て美しさに感動しました。イエズス会司祭であり、キリシタン禁制のために殉教した悲劇を知りました。それ以来、キリシタンに関係する資料を少し読むようになりました。その過程で、稲垣さんのブログで、音吉(1817-1867)に巡り合ったのです。稲垣さんは漂流民コミュニケーション研究者です。音吉はペトロ・カスイ岐部より170年後の人物ですが、遭難し、漂流民となり、さらに、クリスチャンになったのです。

音吉は14歳の時に、水主として千石船宝順丸に乗り組み、江戸の帰路、遠州灘で遭難しました。太平洋を14か月漂流し、乗組員14名の内わずか3名が生き残りました。北米の原住民に救助され、その後、イギリス人の会社に保護されました。マカオに渡り、宣教師ギユツラフの下で「ヨハネによる福音書」の日本語訳を行いながら、日本への帰国を願っていました。アメリカ商船モリソン号で日本に連れて行かれましたが、当時日本は鎖国状態であり、三浦半島野比沖で、外国船打払令(1825-1842)により、問答無用で追い払われました。20歳の時でした。



音吉顕彰会 齊藤会長

(オーチャードロード長老教会前で)

音吉の郷里である美浜町では、回船業者も、乗組員も多くいましたが、遭難する人もいて、痛恨の思いを抱いてきました。菩提寺を大切に維持してきました。生存しても、帰国が叶わないつらい歴史もありました。郷里の人々は2002年、音吉顕彰会 <http://otokichi-i.com/index.html> を立ち上げました。帰国できなかった音吉を「幕末の日本に海外から影響を与えた男」として紹介しています。はからずも音吉は世界一周しましたが、わずかな資料を手掛かりに、現地すべてに足を運び、調査し、他の漂流民顕彰会との交流をし、講演、出版、演劇などのパフォーマンスなどを行い、音吉を知ってもらいたいと願う200名余の会員がいます。

その中心人物が美浜町元町長齊藤宏一氏です。彼はシンガポールへは11回、その他、北米、ハワイ、ロンドン、マカオ、上海と、音吉の立ち寄ったすべての場所へ、計23回足を運ばれました。そして現地の人々と心の通い合う交流を重ね、交誼を得て、音吉の足跡を発見して来ました。

帰国を許されなかった音吉はマカオに住んで働き、習得した英語を用いて、政治においても、貿易においても国際的な広がりを持った活動をしたばかりでなく、漂流の憂き目にあった幾多の日本人を保護し、帰国できるように援助を惜しまなかった人です。やがて音吉はイギリス国籍を取得し、イギリス人の妻の故郷であるシンガポールに1862年に移り住み、そこでも開国の兆しのあった幕府の使節と会見し、助言しています。

今回、和訳聖書印刷の場となったラッフルズホテル、使節の宿泊したアデルフィホテル、音吉が最後まで出席したオーチャードロード・プレスビテリアン(長老)教会を見学しました。フォートカニングパークにある音吉の娘、また恩師ギユツラフ夫人の墓地は翌日に予定された行事の準備のため閉鎖されていて見ることはできませんでした。シンガポールの中心地に広大な美しい無宗派の日本人墓地公園があります。シンガポールの日本人会が管理しています。音吉の遺灰を納めた納骨堂の中にも入り、御堂で、顕彰会の一行は数珠を手にして、線香を捧げ、音吉を偲びました。墓地の庭で、座禅の代わりに、齊藤会長は横笛を吹いて、吹禅とし、太極拳のグループは舞って、動禅とし、音吉への供養としました。顕彰会の皆様の音吉への深い愛と尊敬の思いに、胸を打たれました。